

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 5 日現在

機関番号：12601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2014

課題番号：25580037

研究課題名(和文)「会館」を発信源とした朝日新聞社による文化事業の記録化と学術的分析

研究課題名(英文) Documentation and Analysis of the Cultural Activities originating from the "Asahi Kaikan" by The Asahi Shimbun Company

研究代表者

ゴチェフスキ ヘルマン (GOTTSCHEWSKI, Hermann)

東京大学・総合文化研究科・准教授

研究者番号：00376576

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,800,000円

研究成果の概要(和文)：これまで散逸していた朝日会館の機関誌である『會館藝術』誌の誌面データの収集および記事や広告のデータベースの作成を行い、朝日新聞大阪本社や竹中工務店その他の資料室において調査した。これにより朝日会館の建築・運営・文化事業の内容についての詳細かつ豊富なデータを収集することができた。また、こうした調査を通じて関西圏の研究者や往事の朝日会館を知る方々と交流する機会が持てたことも大きな収穫であったといえる。

研究成果の概要(英文)：Starting from the collection of the scattered source material of the journal "Kaikan Geijutsu" a database of its articles and advertisements was created and the archives of Asahi Shimbun and the Takenaka Corporation and other research facilities were investigated. Thus a lot of detailed data about the architecture, administration and cultural activities of the Asahi Kaikan were collected. This project also contributed to a prolific exchange with researchers from the Kansai area and with people who were personally acquainted with the past Asahi Kaikan.

研究分野：音楽学

キーワード：文化施設 大阪 雑誌研究 音楽 演劇 映画 文学 美術

1. 研究開始当初の背景

本研究は、1926年から1962年まで大阪・中之島に存在していた大阪朝日会館の文化事業を研究対象としている。管見によれば、少なくとも関西の近代文化史において大変重要な役割を果たしたと思われるこの文化施設についての研究文献は、小倉孝氏の文献などいくつかの例外はあるものの、限られた数しか存在していなかった。また、朝日会館に勤務していた加納正良氏のコレクションをまとめた『なつかしの朝日会館』(2004年)には複数の寄稿者による回想記が掲載されており、大変参考にはなるものの、必ずしも会館の活動全体をカバーするものではなかった。こうした研究事情には、朝日会館の文化活動が多分野に渡るため全貌が掴みづらいこと、近代の文化研究がどうしても東京中心に議論が進みがちであることなどが影響しているものと思われる。

また朝日会館から発行されていた『會館藝術』についても、その重要性は関西圏の研究者によって認識されてはいたものの、体系的に収集し、その流れを追って行くという作業は、猪熊雄治氏による戦前までの『會館藝術』についての論文(1998~99年)以外には、これまで限定的にしかなされてこなかった。また、制度上は『會館藝術』は朝日会館の機関誌という位置付けになるわけだが、両者を関連づけ、比較考察するという視点もこれまで存在しなかった。

上記背景をまとめていうならば、朝日会館と『會館藝術』はその重要性が認識されつつも、その実態把握は遅れていたといえる。なおかつ、年が経つにつれて往時の会館を知る方がお亡くなりになっていくという状態でもあった。

当研究会ではこうした状況を鑑み、朝日会館と『會館藝術』自体を研究テーマの中心に据え、朝日会館の運営体制やそこで行われた文化事業の調査と『會館藝術』誌面の調査を両輪に、その活動実態の調査を目指したものである。

2. 研究の目的

本研究は大阪朝日会館とその機関誌『會館藝術』の活動実態を探ることを第一の目的とした。しかし、その射程は必ずしもそれらの実態調査だけには留まるものではなかったと考えている。以下、本研究の成果を通して貢献できると考えられる論点について記してみたい。

東京以外の地域における文化施設の歴史

東京については、すでに新藤浩伸氏による日比谷公会堂の研究(2014年)などがあり、一定の知見が得られている。しかし、他地域のそれについては、資料の散逸などの条件も

あり、詳細な演目や運営理念にまでたちいった体系的な調査は進んでいない状態である。朝日会館の研究は、こうした東京以外の地域における文化施設のありかたについて、新しい知見を与えてくれるものとなった。

企業による文化事業の歴史

朝日会館は朝日新聞社という私企業の運営になるものであるが、単なる興行ではなく公益性を目指していた。今でいう企業メセナのはしりのような存在だったわけだが、主催事業を積極的に催したり、友の会制度を実施したりと、様々な試みを行っていた。一方に朝日新聞社の理念があり、他方に時代状況があり、両者の兼ね合いのなかでそれらは成立したものである。公営・私営問わず、現在でも存在するだろう文化施設における理念と現実の相克の端緒を、朝日会館に見ることができ

各種文化ジャンルの歴史

朝日会館は積極的な運営を行ったこともあり、各種文化ジャンルの歴史にも貢献するところがあった。具体的には戦前の関西における雑誌出版、戦後の創作オペラ運動、関西における新劇運動、映画評論活動などがあてはまるが、こうした貢献についても本研究によって、ある程度明らかにすることができた。

3. 研究の方法

本研究の方法は以下の3点を中心とする。

『會館藝術』をはじめとする各種資料の収集および整理

各種図書館、資料室(このなかには朝日新聞大阪本社や竹中工務店の資料室なども含まれる)などを調査し、『會館藝術』誌の誌面データやパンフレット・チラシ類のデータを収集・整理した。また『會館藝術』誌については、収集した誌面データをもとに、記事データベースを作成した。

朝日会館を直接知る人物への聞き取り調査

朝日会館が活動していた時期を直接知る方にインタビューを行った。可能であれば、ご所蔵資料を閲覧させていただいた。

メンバー間の情報交換

定例(1~2か月に一回程度)で研究会を開催し、メンバーによる成果報告と情報交換を行った。本研究には映画・音楽・文学・演劇・美術・雑誌研究の専門家が集まっているが、かならずしも各メンバーで知識や問題意識が共有されているわけではない。こうした状況を解消し、研究会全体で意志を共有していくために、上記の作業は必要不可欠であった。

4. 研究成果

本研究の成果としては以下のものがある。

『會館藝術』誌の記事データベースの作成
収集した誌面データをもとに記事データ
ベースを作成した。このデータベースはまだ
暫定のものであり、今後ブラッシュアップす
る可能性を残しているが、現段階においても
その総体を把握するには十分なデータが得
られたものと考えている。以下、その概要に
ついて記してみたい。

『會館藝術』は1931年5月から53年10
月にかけて、後述するような中断を挟みつつ
も、継続して発行されていた朝日会館の機関
誌である。当初は朝日会館の催しの紹介がメ
インであったが、徐々に総合文化雑誌とし
ての側面を強めて行った。

1941年12月号で一旦終刊したのち、43年
6月には『大阪文化』と誌名を変えて復活し、
44年4月にはさらに『厚生文化』、46年1月
には『會館文化』、47年6月には『DEMOS』と
変更し、さらに52年11月に再度『會館藝術』
と誌名を戻し、53年9・10月合併号で終刊し
たものである。また42年から43年上半期に
かけての空白期間についても、今回研究会の
調査で、規模は縮小されているものの、内容
的には雑誌にかなりちかいパンフレット
(『月の朝日会館』)が発行されていたこと
も明らかになった。

調査の結果、『會館藝術』の誌面の在り方
には時期的な変遷があることが分かった。現
在研究会では5つの時期を想定している。

第1期は草創期といえるもので時期としては
31年から32年までである。この時期は、い
まだ不定期刊行の時期で、誌面はいわば朝日
会館における催しの解説・写真付き豪華プロ
グラムといった性格の強いものであった。

第2期は1933年から38年までの時期であ
る。1933年7月号より月刊化した『會館藝術』
はそれまでのプログラムの位置づけを離れ、
「高雅で気品ある藝術雑誌」を志向するよう
になる。この時期より、かならずしも会館の
催しとは関連のない著名人による文章がお
おく掲載されるようになる。

1938年8月より『會館藝術』は有保証誌の
認定を受け、時事的な話題についても扱える
ようになる。この結果、第3期の「総合文化
雑誌」化する時期がもたらされる。この時期
には時局を反映したような評論が掲載され
ると同時に、文芸(詩、小説などの創作)の
比重が高まるなど、誌面が多様化を見せる時
期である。また、この時期には一般書店での
販売を開始するなど、その販路を拡大した時
期でもあった。しかし、雑誌統廃合の影響を
受け、41年12月号で廃刊となる。

43年6月より発刊する『大阪文化』をもっ
て第4期が開始する。この時期には判型もか
なり縮小し、ページ数も減少することになる
が、誌面上もこれまでのような文化的内容よ

りも「厚生運動」「銃後生活」といった話題
が強調されてくる。

第5期は戦争終結から53年の廃刊までの
時期である。この時期、不安定ながらも誌面
の充実をはかり、再度文化雑誌としての地位
を獲得することになる。以上の5期を変遷過
程としてとらえている。



写真 『會館藝術』創刊号～第3号(豊田
善敬氏所蔵)

また、記事データベースを作成・調査した
結果、『會館藝術』誌は、それほど規模の大
きな雑誌ではなかったにも関わらず、かなり
充実した執筆陣であったこと、そのなかには
各執筆者の全集に未収録のテキストが含ま
れていることも明らかになった。

朝日会館の運営・文化事業の実態の把握

朝日新聞社社史編修センターをはじめと
する各種資料室への調査によって朝日会館
の活動の概要を把握することができた。その
概要を以下に記す。

朝日会館は1926年10月に竣工した朝日新
聞社を経営母体とする文化施設であり、内部
に公演場(約1600人収容)と展覧会場を備
えていた。当初運営は社内に設けられた「朝
日会館運営委員会」によってなされていたが、
28年2月から運営を社会事業団に移管すると、
積極的に主催公演を行うようになる。その中
には「映画アーベント」や「アサヒ・コドモ
の会」など後々まで続く人気企画も生まれた。

今回の調査の結果わかってきたことは、朝
日会館の活動は時代的な変遷を帯びている
ということである。ここでは5つの時期に分
けて述べてみたい。

第1期は開館から1928年2月までの時期
である。先述のようにこの時期運営は社内の
「朝日会館運営委員会」が担当しており、映
画・音楽・演劇・能楽・美術展・講演会など
が開催されていたが、主催事業の数は少なく、
いまだ萌芽期といえるものである。

第2期は28年から1930年代後半(日中戦

争開始前後)までを考えている。この時期には、社会事業団の運営の下、盛んな洋画の上映や海外演奏家による演奏会などを主催し、盛んな文化事業を行ってゆく。一方で、満州事変以降、時局を反映した講演会などが開かれてゆくようになる。

第3期は日中戦争開始前後から戦争終結までの時期である。この時期、文化統制が行われるようになり、朝日会館の活動にも制約が加えられるようになる。とはいえ、まったく文化活動が行われなくなるのではなく、新交響楽団の公演、娯楽性の高い邦画の上映、文学座などの新劇公演等が行われていた。

第4期は戦後から53年11月までの時期である。この時期、再び自主的な活動の可能性を取りもどした会館は、ハイパーインフレを背景とした困難な状況において、戦前以上に様々な試みを行うようになる。それは演奏団体・劇団の支援から、労音・労演といった鑑賞団体の支援まで及んだ。

会館は53年12月から朝日ビルディング社の運営に移り、閉館まで主に映画上映を行うようになる。しかし、56年のウィーン・フィルの来日公演など見逃せない事業もあった。上記時代区分は概要的なものではあるが、一つの目安となると考えている。

本報告では詳細にたちいった叙述は行わないが、こうした変遷のなかで会館の催しのラインナップも変化していったのである。

以上、『會館藝術』と朝日会館の活動について概略を述べたが、今後はこれまでの研究で取りこぼした部分も含め、調査を進めていきたいと考えている。

また、調査の過程でこれまで現存しないとされてきた朝日会館のカラー写真を発見できたことも大きな成果であった。

朝日会館の活動の歴史的意義

朝日会館の活動は様々なジャンルにおいて、影響を残した。新劇についていえば、朝日会館には、地元京阪神の劇団のみならず、築地小劇場、左翼劇場などの東京の劇団も来演したことが分かっている。大正末期以来の新劇運動に主要な役割を担ったのは、東では築地小劇場だとするならば、西では大阪朝日会館であった。

また音楽については、結成して間もない新交響楽団を招くなど、戦前より関西における洋楽演奏の中心であり、戦後は後に全国展開を見せる労音運動や、関西初の音楽運動である創作オペラ運動の起点となったことが特筆される。こうした朝日会館の活動の分析を通じて、関西における洋楽需要の一面を明らかにできると考えている。

『會館藝術』の意義としては、必ずしも雑誌出版が盛んでなかった大阪において長期間に渡り刊行された雑誌であったこと、さら

に1940年頃には全国誌化をも目指していた点が挙げられる。誌面の分析を通じ、東京とは異なったモダニティの形について考察する機会を与えてくれるものと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

- 1 ヘルマン・ゴチェフスキ/李京粉「大韓帝国愛国歌 に隠されていた韓国民謡の発見 フランツ・エッケルトが編曲した日韓の国歌再考」(『東洋音楽研究』第78号、2013年、1~21頁、査読あり)
- 2 Gottschewski, Hermann, "Nineteenth Century Gagaku Songs as a Subject of Musical Analysis: An Early Example of Musical Creativity in Modern Japan" (*Nineteenth Century Music Review*, Vol. 10, 2013, pp.239-264, Peer reviewed)

〔学会発表〕(計17件)

- 1 白井史人「朝日会館・『會館藝術』における映画上映」(「『會館』文化と宣伝映画『朝日は輝く』(1929)」、2015年3月21日、東京大学、東京都目黒区)
- 2 長木誠司「朝日會館と日本のオペラ/歌劇」(「『會館』文化の諸相 映画・演劇・音楽・文学」シンポジウム、2015年3月15日、東京大学、東京都目黒区)
- 3 山上揚平「『朝日会館』誌に於ける音楽 同時代音楽専門誌との比較から」(同上)
- 4 紙屋牧子「大阪朝日会館における映画上映(1926~1962): その「モダニズム」と「ナショナリズム」(同上)
- 5 大森雅子「朝日会館と新劇 ゴーリキー作『どん底』の上演とその受容について」(同上)
- 6 茂木謙之介「雑誌『會館藝術』および『厚生文化』における「文芸」について」(同上)
- 7 中村仁「大阪朝日会館における洋楽公演」(同上)
- 8 紙屋牧子・白井史人「『映画アーベント』での上映作品 朝日会館における映画上映」(同上)
- 9 ヘルマン・ゴチェフスキ「文化」(Kultur)の定義」(「『會館』という文化装置 『會館藝術』と大阪朝日會館」シンポジウム、2015年3月14日、東京大学、東京都目黒区)
- 10 前島志保「『會館藝術』の定期刊行物としての特徴とその意義 主に1941年までを中心に」(同上)
- 11 岡野宏「朝日會館の歴史概観」(同上)
- 12 高山花子「折々の混在 雑誌『會館藝術』に描かれる「大阪」」(同上)

13 山本美紀「朝日会館から大阪フェスティバルホールへ アウセイ・ストローク 文化装置のデザイナーとしての音楽マネージャー」(同上)

14 Maeshima, Shiho, "Notes of Caution on the Use of Modern Japanese Print Media as Source Material: Lessons from Historical Studies of Journalism" (*The 26th Annual Conference of the Japan Studies Association of Canada*, 5th, Oct., 2013, The University of Saskatchewan, Saskatoon, Canada)

15 ヘルマン・ゴチェフスキ「フランツ・エッケルトと独日韓の音楽文化交流 去年の資料発見から2016年の歿後百年記念へ」(洋楽文化史研究会、2013年7月13日、東京大学、東京都目黒区)

16 Maeshima, Shiho, "Consumerism, the Housewife, and the Modern Girl: Consequences of Interwar Cosmopolitanism in Japanese Popular Magazine Advertisements" (*Asian Studies Conference Japan*, 30th, June, 2013, J. F. Oberlin U., Tokyo, Japan, Machida, Tokyo)

17 前島志保「戦間期日本の婦人雑誌と出版の大衆化現象：婦人雑誌の意義の見直しから比較研究に向けて」(20世紀メディア研究所、2013年4月27日、早稲田大学、東京都新宿区)

〔図書〕(計6件)

1 ヘルマン・ゴチェフスキ・長木誠司ほか『陶酔とテクノロジーの美学 ドイツ文化の諸相 1900 - 1933』(青弓社、2014年、286頁、ゴチェフスキ担当248~273頁、長木担当153~172頁)

2 ヘルマン・ゴチェフスキほか『仰げば尊し 幻の原曲発見と『小学唱歌集』全軌跡』(東京堂出版、2014年、368頁、担当37~66、88~94、110~112、227~289頁)

3 Maeshima, Shiho and others, *Japanese Journalism and Japanese Newspaper: A Supplemental Reader* (Teneo Press, 2014, 281p., pp.3-29)

4 Maeshima, Shiho and others, *Resilient Japan: Papers Presented at the 24th Annual Conference Association of Canada* (Japan Studies Association of Canada, 2014, 295p., pp.110-139)

5 長木誠司ほか『日本の吹奏楽史：1869 - 2000』(青弓社、2013年、201頁、担当162~168頁)

6 Maeshima, Shiho and others, *Expanding the Frontiers of Comparative Literature Vol. 2: Toward an Age of Tolerance* (Chung-Ang University Press, 2013, 466p., pp. 354-363)

〔その他〕

1 「會館の時代 中之島に華開いたモダニズムとその後」展(東京大学駒場博物館、2015年3月7日~4月5日)

2 「會館の時代 中之島に華開いたモダニズムとその後」シンポジウム(2015年3月14・15日、東京大学)

3 トークイベント「都市と会館 昭和初期「近代大阪」における大阪朝日会館」(2015年3月9日、東京大学)

4 「「會館」文化と宣伝映画『朝日は輝く』(1929)」(2015年3月21日、東京大学)

5 「宣伝映画『朝日は輝く』上映+ギャラリートーク」(2015年4月3日、東京大学)

6 ホームページ

<http://fusehime.c.u-tokyo.ac.jp/gottschewski/kaikan/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

ヘルマン・ゴチェフスキ

(GOTTSCHESKI, Hermann)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：00376576

(2)研究分担者

長木 誠司 (CHŌKI, Seiji)

東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：50292842

前島 志保 (MAESHIMA, Shiho)

東京大学・大学院総合文化研究科・准教授
研究者番号：10535173

芝田 江梨 (SHIBATA, Eri)

大阪市立大学・研究員
研究者番号：50597177

(3)連携研究者

山上 揚平 (YAMAKAMI, Yōhei)

東京藝術大学・非常勤講師
研究者番号：20637079

(4)研究協力者

伊藤 由紀 (ITŌ, Yuki)

東京大学・大学院総合文化研究科・博士課程学生

岡野 宏 (OKANO, Hiroshi)

東京大学・大学院総合文化研究科・博士課程学生

大森 雅子 (ŌMORI, Masako)

研究者番号：90749152

東京大学・学術研究員

紙屋 牧子 (KAMIYA, Makiko)

早稲田大学・演劇博物館招聘研究員

川下 俊文 (KAWASHITA, Toshifumi)

東京大学・大学院総合文化研究科・博士課程学生

白井 史人 (SHIRAI, Fumito)

東京大学・大学院総合文化研究科・博士課程学生

高山 花子 (TAKAYAMA, Hanako)

東京大学・大学院総合文化研究科・博士課程学生

中村 仁 (NAKAMURA, Jin)

桜美林大学・非常勤講師

古舘 遼 (FURUTATE, Ryō)

東京大学・大学院総合文化研究科・博士課程学生

茂木 謙之介 (MOTEGI, Kennosuke)

東京大学・大学院総合文化研究科・博士課程学生

山本 美紀 (YAMAMOTO, Miki)

奈良学園大学・准教授